

愛知学院大学歯学部同窓会愛知県支部・同歯科技工専門学校同窓会 合同学術講演会抄録、略歴
『現代インプラント事情 インプラントを有効な選択肢とするための留意点』 小宮山 彌太郎
抄録

オッセオインテグレーションを礎とするインプラント療法が、患者の QOL の改善に有効なばかりでなく、医療従事者にとっても有力な持ち駒と目されるようになってから久しい。科学的背景を持つハードウェアに、細心の配慮に基づくソフトウェアが組み合わされた場合には、きわめて優れた結果を示すことが知られていたが、近年、インプラントに関わる問題点が多く報告されるようになってきた。当然のことながら、インプラント適用患者数の増加に従い偶発症も増えるであろうことは想像に難くないものの、以前に比較して顕著に目立つ傾向を感じているのは筆者だけではあるまい。

確かに、数多くの業者がインプラントに携わるようになり、それに伴い種々の形態ならびに表面性状のものが市販されている。その多くが、オッセオインテグレーションの獲得のみに主眼を置く、言い換えれば近未来のみを見据え、従来のインプラントが目指してきた長年月にわたる持続した安定性がないがしろにされてきているようにしか見えない。インプラント療法を一般的な歯科治療の延長線上にあるものと捉える歯科医療従事者にとっては、10年、20年あるいはそれ以上を目指す必要はないのかもしれない。視点を遠くに置くことができる治療法であるにもかかわらず、比較的短期間内に問題点が露呈している背景には、条件が揃わなくとも審美、発音あるいは食物の停滞などといった患者の要求に安易に迎合しすぎることで、将来の口腔内の変化を考慮に入れていない傾向にあることも要因と考えられる。被圧変位量ならびに被圧変位特性が天然歯のそれとは様相を大きく異にするインプラントでは、天然歯を支台とした補綴物よりも、はるかに高い剛性と精度とが与えられないならば、長期間にわたるオッセオインテグレーションの持続は期待できない。

1960～70年代に Brånemark ならびに Schröder らにより確立された、インプラント療法のプロトコールがすでに時代錯誤で、今日の治療指針にはそぐわないものと捉えている歯科医師は多いと思われる。しかしながら、現実には20年以上経過した今日でも、大きな努力を払わなくとも大きなトラブルを抱えることなく、患者の口腔内で機能を発揮し、そのQOLの維持に貢献している姿を見ると、本当に化石のような存在と断言できるのか疑問を感ずる。先を見つめた治療法であったのではないであろうか。

長期経過症例を交えて、医療の本質を考えてみたい。

略歴

1971年 東京歯科大学卒業
1976年 東京歯科大学大学院修了(歯科補綴学専攻)
1977年 東京歯科大学講師
1980～1983年 Sweden, Göteborg 大学歯学部、医学部客員研究員
1990年 東京歯科大学助教授
同年 プローネマルク・オッセオインテグレーション・センター開設
2006年 東京歯科大学臨床教授
2006年 神奈川歯科大学客員教授